

## 歴博 くらしの植物苑だより

第118回くらしの植物苑観察会 1月24日（土）

### 武藏野の平地林の保全

犬井 正

（獨協大学経済学部教授・環境共生研究所所長）

東京西郊の武藏野には、現在でも「武藏野の雑木林」として市民から親しまれています。クヌギ、コナラ、アカマツなどからなる平地林がみられる。武藏野は関東ローム層に厚く覆われた洪積台地上にあり、台地面には大きな河川や湖沼がなく、地下水位も低いので水を得ることが難しく、江戸時代まで大部分は無居住地区であった。往古には武藏野は本来の自然植生であるシイ・タブ・カシなどの常緑広葉樹の森林に覆われていたといいます。古代・中世には水の得やすいところに集落が形成され、その周辺が常畠として拓かれたが、それ以外の広大な台地面は焼畠や放牧地や入会耕場など低位な利用にとどまっていた。焼畠耕作や採草のために毎年野火が放たれ、台地面は常緑広葉樹林から灌木を交えたススキ草原に遷移していった。

江戸時代になって人口の増加を支えるべく畑作を中心とした新田開発が武藏野各所で行われた。乏水性の台地である武藏野に拓かれた新田村落の耕地は畑地であった。しかも表土は関東ロームを母材としているため、酸性で活性アルミニウムが多く、リン酸分や腐植が欠乏した地力の低い土壤であった。したがって農民は畑作農業を維持するために、毎年冬になると平地林に入り、林床の下刈りを行い多量の落ち葉を採取して堆肥をつくり、畑地に投入しなければならなかった。落ち葉採取だけでなく、平地林の再生力を越えない範囲で伐採を繰り返し、燃料用の薪や炭も得てきた。屋根葺き材料のカヤ、農具の柄、薬草や山菜・キノコなども採取した。また、平地林は関東平野に吹き降ろす冬の「からつ風」から畑地の土壤や屋敷を護るとともに、台地や丘陵に降った雨を保水する役割も果たしていた。つまり、武藏野の平地林は農業の再生产や農家生活を維持するための農用林で、萌芽更新によって管理・育成されてきた人工の二次林である。

第二次世界大戦後の高度経済成長期になると、手間がかかる落ち葉堆肥による土づ

くりをやめて金肥や化学肥料に転換した。また「燃料革命」により、薪炭は石油やプロパンガスにとって代わられた。その結果、東京都区部に近接した市街地周辺の平地林は農用林としての役割を終え、住宅団地、戸建て住宅、工場などの用地に売却されて次々に姿を消した。ところが北武蔵野には、首都 30 km圏内他所では見られないほど多くの平地林が残っている。特に、三富新田地区では、今でも多くの農家が平地林から採取した落ち葉による堆肥を使った、安全でおいしいサツマイモや野菜を生産し続けている。しかしここでも、最近では平地林そのものが急激に減少している。その原因は相続税である。近年の地価高騰の影響を受けて、平地林に課税される相続税の高額負担が、農業後継者に重くのしかかる。農家は相続が発生すれば、平地林を売却して納税せざるを得なくなる。売却された平地林は、市街化調整区域内でも合法的に転用できる材料・土石置き場、倉庫、霊園、廃棄物処理場などに姿を変えた。特に、廃棄物処理場は平地林が目隠しのようにして立地できる格好の場となり、ここがダイオキシン類の発生源になり、汚染問題で周辺住民に不安をつのらせた。

300 年以上もの間、農家の宅地と畠地と平地林をセットにした地割を維持し、有機質肥料の堆肥に育まれた安全な野菜をつくり続けながら、首都近郊の樹林緑地としての良好な環境を提供するとともに、生物の多様性を維持してきたこの地域が、人間や他の生物の健康と安全をむしばむ有害化学物質の発生場所へと変わった現実はなんとも皮肉である。北武蔵野の三富地域や隣接するくぬぎ山地区は、平地林の消失やダイオキシン類による汚染問題などが顕在化したことから、全国的に注目され、その解決に向けて地権者をはじめNPOや行政などによる平地林保全への取り組みが進められてきた。2004年11月には多様な活動主体が集まり「くぬぎ山地区自然再生協議会」が設置され、2008年7月には「埼玉県みどり再生県民会議」がスタートした。しかし、様々なステークホルダーによる自然再生の合意形成の困難さとともに、財政的な負担の方策などの課題が立ちはだかっており、現在、武蔵野の平地林の保全は思うような進展はみられないが、今こそ叡智を結集して保全を進めていかなければならない。

---

### 次回予告

第119回くらしの植物苑観察会 2009年2月28日（土）  
「ブナの林と木地屋の世界」 中川 重年（本館研究部客員教授）  
13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料